

伝ヨーゼフ・ハイドン《おもちゃのシンフォニー》を巡る問題を整理する ——モーツアルトは《おもちゃのシンフォニー》をどう捉えていたか——

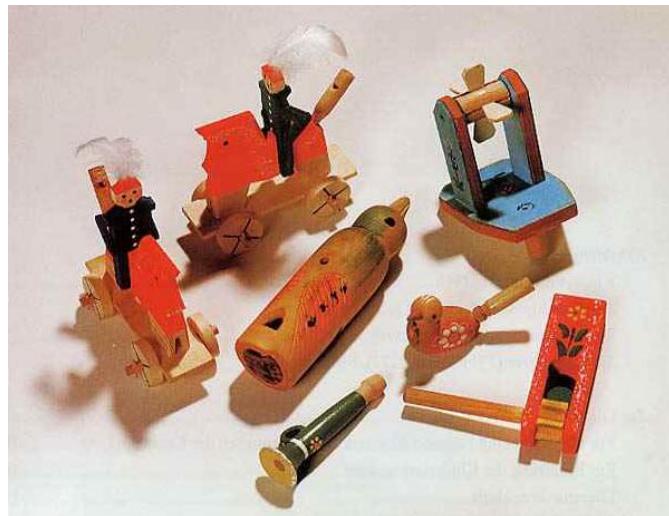
野口秀夫

1. はじめに

教授：今回は伝ヨーゼフ・ハイドン《おもちゃのシンフォニー》の作曲家に関する諸説を整理し、各説の伝播における様々な問題点を洗い出して議論してもらいたい。何故この問題を取り上げるかというと、モーツアルト研究の立場からも等閑視してばかりいられないテーマが炙り出されるであろうからだ。

犬輔：《おもちゃのシンフォニー》で使われるおもちゃを「ベルヒテスガーデンの楽器 Berchtesgadener Instrumente」と言うんだそうですが、ベルヒテスガーデン Berchtesgaden って何なのですか。

教授：ザルツブルクの南方、約 30km にあるバイエルン州の町だ。そこで作られた楽器は、18世紀に国際的に人気のファッショニ・アイテムであった。子供たちは路上でそれを楽しみ、貴族も邸宅や修道院で、しばしばカーニバル・パーティで楽しんだ。18世紀半ば頃、特にベルヒテスガーデンの中心部での玩具製造業者の生産が劇的に増加した。さまざまな商品の販売は主に市場で商品をセンセーションナルに販売する巡回商、多くの場合は小規模な家族経営によって確保されていた^{注1}。右図は Rupert Larl, Axams (1996) による写真^{注2}で、パイプ馬、トランペット、ガラガラ、パイプ鳥がそれぞれベルヒテスガーデンの職人技によるものである。その他、カッコウはインスブルックの、風力タービンはボヘミアのオリジナルに基づく複製である。



鳥代：《おもちゃのシンフォニー》の作曲者としてヨーゼフ・ハイドン、ミヒヤエル・ハイドン、レオポルト・モーツアルト、エトムント・アンゲラーの名前が挙げられてきたわね。それぞれの説についてその根拠を見ていきましょう。

2. 《おもちゃのシンフォニー》の作曲者別の版

2.1 伝ヨーゼフ・ハイドン版

教授：1786頃イギリスのフォースター出版社から、作曲者をヨーゼフ・ハイドン Joseph Haydn (1732–1809) とする《おもちゃのシンフォニー The Toy Symphony》が出版された。ただしこの情報は、1864に刊行された同社の社史を記述した部分によるもので、その印刷楽譜そのものは未発見である。以後、ヨーゼフ・ハイドンの作品としてこの曲はさまざまな出版社から刊行されている^{注3}。

鳥代：ドイツでの初出版は1813年頃、ライプツィヒのフリードリッヒ・ホーフマイスター（後のペータース）社からで、このとき初めて、この曲のドイツ語通称《子供のシンフォニー Kindersinfonie》が出現したといいます^{注4}。

犬輔：タイトルはこう書かれているそうです^{注5}。“Kinder- / Sinfonie / für zwei Violinen, Baß / und / acht kinderinstrumente / nemlich: / Trompete, Trommel, Pfeifchen, Cymbelstern, / Nachteule, Schnarre, Gukkuk, Wachtel / componirt / von / Joseph Haydn / in Berchtoldsgaden.”

鳥代：ヨーゼフ・ハイドンがベルヒテスガーデンで作曲したと書かれているのですね。

教授：だが、この記述がヨーゼフ・ハイドン作を疑わしいとさせる理由の一つとなりうる。つまり、ヨーゼフ・ハイドンはベルヒテスガーデンを含むザルツブルク周辺を訪問したことはないため、ベルヒテスガーデンに近いザルツブルクに住んでいる弟のミヒヤエル・ハイドンと取り違えられているのではないかというのだ^{注6}。だが、これだけでは断言するには至らない。

犬輔：「ヨーゼフ・ハイドンがベルヒテスガーデンのやり方で作曲した」という意味にも取れますからね。

鳥代：Web からはさらに時代が下った B&H 社の楽譜がダウンロードできます^{注7}（下図）。



犬輔：表紙にハイドンとしか書かれていないので、ヨーゼフとは限らず、ミヒヤエルかも知れませんよ。

鳥代：本文の楽譜の右上をよく見て下さい。J. Haydn とあるのでヨーゼフに間違いありません。この頃にはハイドンと言えばヨーゼフの方を指すことが常識となっていたんでしょう。

2.2 ミヒヤエル・ハイドン版

教授：エルнст・フリツ・シュミット Ernst Fritz Schmid (1904–60) は 1938 にオーストリア・メルクのベネディクト会修道院の音楽書庫で作曲者名ミヒヤエル・ハイドン Michael Haydn (1737–1806) の筆写譜を見つけ、MJb 1951 で発表した^{注8}。

鳥代：楽譜のタイトルは “Pertolsgattner Divertimento a piu stromenti Del Sigre. Michaele Hayden.” とあります。Pertolsgattner は Berchtesgadener の訛りですね。要求される楽器は “Violino unisino Viola e Violoncello Trompeten und Tromerl Gugu Rätscherl Orgelhein [sic!] Cymbalstern Wächtel [sic!]” で、2 つのヴァイオリンではなく、ヴァイオリンとヴィオラの編成となっています。

犬輔：ミヒヤエル・ハイドン版が発見されても、ヨーゼフ・ハイドン名がすべてミヒヤエル・ハイドンと取り違えられていたとは言い難いため、ヨーゼフ・ハイドン名の出版譜はそのままとなったものと思われます。20 世紀中頃にはミヒヤエル・ハイドン版が発見されたからと言ってわざわざそれで演奏してみようというバイオニア的演奏者はいなかつたのでしょうか（実際現在でもミヒヤエル・ハイドン版による演奏を聞くことはできない）。

鳥代：ローベルト・ミュンスター Robert Münster (1928–2021) の評価を引用しておくわね。「ヨーゼフ・ハイドンが本当にそれに加わったのか、彼の場合は単にミヒヤエル・ハイドンとの混同が生じただけだったのかは、わからない」^{注9}。

2.3 レーオポルト・モーツアルト版

教授：エルnst・シュミットは同じ MJb 1951 でこう報告している。「私は 10 年前、父モーツアルトの作品を調べていた際に、バイエルン州立図書館の音楽コレクションに問題の筆写譜を見つけた。このコレクションには、“Cassatio ex G Del Sigr. L. Mozart [L. モーツアルト氏によるカッサティオ ト長調]” のタイトルで “子供のシンフォニー” の非常にきれいな同時代の手稿パート譜が含まれている。[中略] レーオポルト・モーツアルト名義のこの原稿で最も奇妙な点は “子供のシンフォニー” のサイズを 2 倍以上に拡大したバージョンが提供されていることである。[中略] したがって、私たちの前には、行進曲・メヌエット/トリオ・アレグロ・メヌエット/トリオ・アレグレット・メヌエット/トリオ・プレストとという一連の楽章を備えた本格的で、しっかりと形成された 7 楽章のカッサシオンがあり、これにハイドンの “子供のシンフォニー” の楽章が含まれており、レーオポルト・モーツアルトの作とされているのである。主調はト長調なので “子供のシンフォニー” の 3 つの楽章はいつものハ長調ではなく、ト長調である。楽器編成はすべての楽章で 2 つのフレンチ・ホルンによって豊かにされており、特に美しく調律されたコントルダンスではソリストとして使用されている」。つまりその第3、第4、第7 楽章が、3 楽章のハ長調 “子供のシンフォニー” として知られているもののト長調稿である。

鳥代：“Cassatio ex G” は “カッサティオ 元ト長調” の意味ではないのですか。

教授：そうであれば“子供のシンフォニー”ハ長調の元曲がト長調だという表記のように見えるかもしれないが、それは間違が御さない。英語などでex-が名詞の前に付く場合はex-boyfriendのように元カレの意味になるが、ラテン語exはout of, fromの意味で、inの対義語だ。と言っても“Cassatio ex G”も“Cassatio in G”も同じ意味なのだ^{注10}。あえて私の私見を言えば、exの場合は“主調Gから始めて”という調の起点を表し、inの場合は漠然と“主調Gで”という表現なのだ。

犬輔：ついでに伺いますが、CassationではなくCassatioと言うのは何故でしょうか。

教授：カッサシオンはフランス語起源の言葉だから、それをカッサティオとイタリア語風にしたものと思われる。

鳥代：では改めて楽器編成を確認しておきましょう“Due Violini, Due Corni, Trompeterl et Wachtl Ruef, Pfeifferl, Gugu et Corno da Postiglione, Trombl, Rätscherl, Orgel, Wündmühl, Basso”です。

犬輔：使われている用紙についても言及があります。「8段の五線が引かれた用紙、おそらくかなり初期の1760年代頃に作成されたものと考えられる。小さな横長形式の“小さな郵便紙”が使用されている。この用紙はモーツアルト一家に非常にポピュラーで、時にはハイドンにも登場する。透かしにはAFHのイニシャルとアラベスク模様の立っている小男が描かれている」。

教授：クリフ・アイゼン Cliff Eisen (1952-)によれば「作曲者名“L.モーツアルト”は1771年以降ザルツブルクでのみ一般的に使用された紙にマクシミリアン・ラープによって書かれている。ラープは1766から1780に亡くなるまでザルツブルクの宮廷写譜師を務め、間違いなくレオポルト・モーツアルトの作品の信頼できる写本家であった」^{注11}そうだ。

鳥代：エルнст・シュミットはどう結論付けているのですか。

教授：ミヒヤエル・ハイドンの作品である可能性も残しつつも、「これまでヨーゼフ・ハイドンに帰せられてきた“子供のシンフォニー”はレオポルト・モーツアルトの作品である、という想定にはきわめて大きな蓋然性がある」としたのだ。その場合“子供のシンフォニー”は3つの樂章を抜き出し、ト長調からハ長調に移し替えたものということになる。

2.4 エトムント・アンゲラー版

教授：エルнст・シュミットは翌年Mjb 1952に『再度“子供のシンフォニー”について』と題して短い論考を投稿し、こう切り出している^{注12}。「1951年のモーツアルト年鑑で、私はヨーゼフ・ハイドンの名で広く普及し、古い伝統ではミヒヤエル・ハイドンとレオポルト・モーツアルトも作者であると思われる“子供の交響曲”的出典調査について報告した」。そして次のように驚くべき報告をしている。「私たちに伝えられているこの作品の作者に、また一人の作曲家が加わった。ヴィーンのH. C. ロビンズ・ランドン氏は、ハイドンの研究旅行中にオーストリアの修道院の図書館で見つけた“子供の交響曲”的手稿譜に親切に私の注意を引いてくれた。この作品は、カタログ番号L, III, 62でティロル〔チロル〕のシトー派シユタムス修道院の音楽アーカイブに保管されており、タイトルは〔右図の通り^{注13}〕「ベルヒトルツガーデン／ムジーク／編成／ヴァイオリンとヴィオラ／ベース／ウズラ笛、カッコウ笛／風笛、ラッパ／ガラガラ／オルガン〔詳細不明〕／〔以下ドイツ語で〕ウズラ笛へ調／カッコウ笛ト長ホ調／風笛G／ガラガラ 音程なし／オルガン 音程なし／作者：神父エドムンド・アンゲラー／OSB フィーヒト修道院」となっている」。



犬輔：楽譜には作者名をイタリア語で記載しているけど文献でのドイツ語表記に倣いましょう。エトムント・アンゲラーEdmunt Angerer (1740-94)はティロル地方の田舎町ザンクト・ヨハンに生まれました。父は小学校の教師で地元の合唱団の指導者でもあったシュテファン・アンゲラー。父から音楽の手ほどきを受け、さらにインスブルック郊外の町ハルの児童合唱團に入りました。1758、ベネディクト会修道士としてインスブルックから東に30キロほどの町フィーヒトのフィーヒト修道院に入り、当地で合唱指導者、オルガン奏者、音楽教師として働きます。エトムント・アンゲラー神父は当地で数多くの教会作品やオペレッタ、音楽劇を作曲し、尊敬と名声を得て1794に同院内で死去しました^{注14}。

鳥代：エルンスト・シュミットは自説との折り合いをどうしているのですか。

教授：論考の最後にはこう書かれている。「この新しい資料で注目すべき点は、ミヒヤエル・ハイドンの名前で保存されているメルク手稿譜と同様に、2つのヴァイオリンではなくヴァイオリンとヴィオラが登場していること、そしてタイトルにはベルヒテスガーデンとそこにある音楽玩具工場との関係も記録されていることである。子どもたちの楽器の編成には大きな違いはない。シュタムス手稿譜のより詳細な調査はまだ不可能である。しかし、これまでの作品の最も明らかな帰属 (Zuweisung 英語で assignment)、つまりモーツアルトの父親の帰属については、本質的なことはほとんど変わらない」。

犬輔：でもおかしいですよ。レーオポルト・モーツアルト説とアンゲラー説は殆ど同時に同一人物から発表されたというのに、レーオポルト・モーツアルト説だけが先に広く流布し、アンゲラー説が出てきたのはずっと後でしょう。それにもかかわらず、現在はアンゲラー説一色となっているようです。何か理由があるのでしょうか。

教授：非常にいい質問だ。まず、アンゲラー説がすぐに流布しなかったのは、エルンスト・シュミットがアンゲラー版の現物を見ての楽譜研究をすぐにしなかったことによる。一方、レーオポルト・モーツアルト説が広く流布したのは、1960年代以降の音楽学者とジャーナリスト・音楽評論家（新聞記者、放送番組担当者）との接近が要因だと考えられる。一例として渡邊暁雄指揮、日本フィルの演奏を志鳥栄八郎が1960年代に執筆したレコード解説を引用しておこう^{注15}。「最初の曲は、ハイドン（1732-1809）の《おもちゃの交響曲》です。ハイドンはヴィーン古典主義の大家で、みなさんよくごぞんじのモーツアルトやベートーヴェンの先生です。ハイドンは、一般的に『交響曲の父』といわれています。かれは交響曲の基本のかたちをつくりだし、100曲以上もの交響曲を作曲しました。

ハイドンは非常に明るい性格のユーモリストで、とてもこどもを愛したひとでした。かれはある日のこと、町のおもちゃ屋から、かつこう笛や、がらがらという音を出す歯車や、小さなおもちゃのラッパや太鼓を買ってくると、新しい楽譜といっしょに、それをオーケストラの楽員に渡しました。楽員たちはおもちゃを渡されてびっくりしていましたが、そのおもちゃをつかって新しい交響曲を演奏したところ、音楽が非常にすばらしいので二度びっくりしたというエピソードが伝えられています。そのときに演奏した曲がこの《おもちゃの交響曲》であるのはいうまでもありません。

ところが、ごく最近の研究で、この曲はハイドンの作曲ではなく、モーツアルトのお父さんのレオポルトが原曲をつくり、ハイドンの弟のミハエルがおもちゃをいれるように改作したのだ、という説が発表されました。こうなると、ハイドンのせっかくの面白いエピソードがなくなってしまいますが、ハイドンの性格を知るためにも、またこの曲をいつそうたのしく聞くためにも、このエピソードは、このままそっとしておきたいものです」。

鳥代：でもエルンスト・シュミットは「レーオポルトが原曲をつくった」と断定はしていませんよ。1952の「モーツアルトの父親の帰属」という言い方は1951の「ミヒヤエル・ハイドンの作品である可能性も残しつつも、レーオポルト・モーツアルトの作品である、という想定にはきわめて大きな蓋然性がある」というのを指していますから。

犬輔：さらに尾ひれを付けて「レーオポルトが原曲をつくり、ミヒヤエルがおもちゃをいれるように改作した」と言い切ってしまうのはいったいどこから出た情報なのでしょうね。

教授：以後、「レーオポルトが原曲をつくった」という情報が独り歩きする。これは明らかにレコード会社の商魂がリードしたのではないかと考えられる^{注16}。すなわち伝ハイドンの楽譜で録音されハイドン名で売ってきたSPあるいはLPレコードを、内容はそのまで作曲者をレーオポルト・モーツアルトに差し替えてステレオで発売するという、レコード会社にとって「一粒で二度おいしい」販促チャンスの到来、一方でユーザーにとって「羊頭狗肉」の商品を掴まされる混乱の時代のスタートとなった。マスメディアの軽率さを正す術が一介の音楽学者にないのは当時も今も世界規模で変わらない。

鳥代：教授のご立腹はごもっともですが、ではエトムント・アンゲラー版は他の人が詳細研究して、その結果としてアンゲラー説を再発表したことですか。

教授：そうだ。その人はティロル音楽研究所の大学教授、芸術マギスター、哲学博士ヒルデガルト・ヘルマン＝シュナイダー Hildegard Herrmann-Schneider (1951-) である。

犬輔：あっ、その名前覚えてます。2012にティロルでモーツアルトのクラヴィーアのためのアレグロ・モルトハ長調を再発見した音楽学者ですね^{注17}。

教授：そうだ。彼女は MJb1996 でアンゲラー版の詳細研究結果を発表し^{注18}、1997に解説付きの楽譜を出版している^{注19}。そこではアンゲラーが間違いなく“子供のシンフォニー”的作曲者であることを証明に多くの紙数を費やしている。

鳥代：あくまでもアンゲラー版の真の作曲者がアンゲラーであるということの証明ですね。

犬輔：アンゲラーが“子供のシンフォニー”的原作者ということを証明してるんじゃないんだ。

教授：かいつまんで紹介しよう。「この手稿譜は1790頃、つまりアンゲラーの存命中、シュタムスで宗教的な職業に就いていたシュテファン・パルセッリ師によって巧みに書かれている。また各パートには、パルセッリの手による演奏用の実用的な鉛筆メモがある。原稿のタイトルページの上部にあるパルセッリの手による署名 A. a. 17 は、パルセッリが1791年に合唱団長の職に就いたときに作成した音楽カタログ番号である。そのカタログの150ページの番号 17 に作品名無しで、楽器編成：ヴァイオリン、ヴィオラ、バッソ、6つのベルヒトルズガーデン楽器とあり、作曲者が“アンゲラー”と明記されている。登録番号 A. 17 には、アスタークスが付いていて、パルセッリ自身がコレクションのために作品を調達したことを意味する。この作品〔自筆譜〕は偶然ここに来たのではなく、特別に購入されたものなのだ。シュタムス修道院によれば、このような写本登録の条件下では、パルセッリが自分の手で、そして何よりも自らの主導で模写したこの作品を、眞の作者以外の誰かに帰属するとは考えられないという。自筆譜はおそらく遅くとも1868年にフィーヒト修道院の大火災で焼失し、そのときに修道院の音楽がすべて焼失したと考えられる」^{注20}。

鳥代：アンゲラー版の作者が間違いなくアンゲラーであろうことは分かりました。では、原作者についてヒルデガルト・ヘルマン＝シュナイダーはどのように結論付けているのですか。

教授：驚くべきことを述べている。「レーオポルト・モーツアルトは、おそらく作曲家を知らずに、当時の習慣に従って、既に人気のあったアンゲラーの“ベルヒトルツガーデン音楽”を編曲したと思われる。楽器のラインナップは拡張され、当然のことながらヴァイオリン2台とホルン2台のため、当初の“ベルヒテスガーデン”的ヴァイオリン1台とヴィオラ1台のラインナップではなくなり、楽章数もミニチュアの交響曲の3つから7つに増加した。必然的にタイトル“ベルヒトルツガーデン音楽”的削除と、ザルツブルクのセレナードの伝統に沿った最初と最後に行進曲を持ち、三つの速いメヌエット/トリオを含む複数楽章の軽音楽の新しい名前“カッサティオ”となった。また、採用された3つの楽章はハ長調からト長調に移調された。したがって、オーソライズされた筆記者の作曲家名“L. モーツアルト”は間違って“Casatio ex G”的表紙に掲載された」^{注21}。

鳥代：“Casatio ex G”はアンゲラー原曲、L.モーツアルト編曲とすべきだと言うのですね。

教授：そして世界のマスメディアが「子供のシンフォニー」の原作者はティロルのエトムント・アンゲラーであった」というニュースを流し、あっという間に書物やCDに反映されていくのだ。またもや、ほとんどのCDの中身は伝ハイドン版の演奏なのだがね。

犬輔：ところで他の版と異なるアンゲラー版の特徴はないのですか。

教授：聴けばすぐに分かるが、他の版では30小節の第3楽章フィナーレが、アンゲラー版は変奏曲の形になっており46小節に拡大されているのだ^{注22}。

犬輔：アンゲラー版のフィナーレが他と全く異なっていることが考慮されていないのは仮説として致命的であると言わざるを得ません。

3. “子供のシンフォニー”の系統樹

鳥代：今までに出てきた版の特徴を表にしましょう。

版	伝J.ハイドン版	M.ハイドン版	L.モーツアルト版	E.アンゲラー版
楽器編成	2Vn, Bs, 玩具	Vn, Va, Bs, 玩具	2Vn, 2Hr, Bs, 玩具	Vn Va, Bs, 玩具
楽章構成	3楽章	3楽章	7楽章のうちの3楽章	3楽章
主調	ハ長調	ハ長調	ト長調	ハ長調
第3楽章	30小節	30小節	30小節	46小節の変奏曲

犬輔：教授のおっしゃる通りそれが異なった内容になっています。CDなどで作曲家名を挿げ替えてしまうのが如何に安易で冒涜的な行為かということが分かります。

教授：ではこれら4人の作曲家の版についての譜面考証の研究結果を紹介しよう。1988にマインツで行われた大作曲家全集校訂者たちによる「疑わしい作品」をめぐる研究集会における、ケルン・ヨーゼフ・ハイドン研究所ソニヤ・ゲルラッハ Sonja Gerlach (1936-) (右写真)による発表だ。1991に論文として発行されている^{注23}。これは、ハイドン研究所が徹底的に蒐集したこの作品の17種の筆写譜と初期印刷譜を厳密に譜面比較することによって、伝承経路を設定しようとするもので、結論として、以下のことを述べている。

- ① この作品の弦3部編成はバス声部の他に、ヴァイオリンとヴィオラ稿「7点」と2つのヴァイオリン稿「10点」があるが、伝承されていく誤りを正確に継承している特性からヴァイオリンとヴィオラ稿が真正である。② 真正に近い



資料ほど作曲者をミヒヤエル・ハイドンとしていて、なかではメルク修道院資料が誤りの少ない最上のものである。③ここから、この作品は「ミヒヤエル・ハイドン」名「4点」からただの「ハイドン」名「4点」となり、そして「ヨーゼフ・ハイドン」名「7点」へと伝承がすり替わっていった、と考えられる。④レオポルト・モーツアルト稿とアンゲラー稿「各1点」はそれらとは別系統であり、伝承の初期に分岐したものと思われる。⑤レオポルト・モーツアルト稿は唯一ト長調の7楽章で、2つの系統から成り立っており、本来7楽章で書かれていたものから後に3楽章が抜粋されてハ長調に移調されたのではないことはほぼ確実である。⑥アンゲラー稿は、30小節の第3楽章フィナーレが46小節に拡大されている唯一のもので、それ自体が編曲である。⑦7楽章稿はオリジナル稿ではなく、したがってレオポルト・モーツアルトを真作者とする根拠はない。メルク修道院資料とその信頼性は不充分であるが、反証もまたなく、ミヒヤエル・ハイドンが真作者である可能性はある。

鳥代：ようやくすっきりした説明が得られましたね。

犬輔：でも、先ほどのヘルマン＝シュナイダーの MJb1996 の論考は時系列的に見て、ゲルラッハの1991の論文を見てのことですよね。言及はなかったのでしょうか。

教授：鋭い質問だ。ヘルマン＝シュナイダーは最後のページの注にこう記している。「[ゲルラッハ] “子供のシンフォニー”はミヒヤエル・ハイドン作曲の可能性について以前よりも強く議論される必要があるという結論に達したが、ゲルラッハ自身『様式的手法を用いてまだ検討する余地がある』と述べている（164ページ）。一方で、彼女はシュタムス稿を翻案であるとみなしているが（160ページ以下）、他方で、既知のすべての情報源の系統樹で独特の位置を与えており（157ページ）、それが『いくつかの箇所で特異な読み方があり、音楽的な観点からすると、他の音源よりも好ましいと思われる』（175ページ）と述べている」^{注24}。

鳥代：E.アンゲラー版が最も音楽的に優れているのならば、やはり原作であるより、洗練された編曲である可能性の方を考えるべきではないでしょうか。また彼女がミヒヤエル・ハイドン版からL.モーツアルトが編曲したという説をとらないのは何故なのでしょう。

教授：こう書いている。「ザルツブルクの宮廷写譜師マクシミリアン・ラープの行動は、18世紀の観点からはほぼ自明のことであった。すなわち原作者【この場合アンゲラー】の暗黙の流用であったが、もしこの作者がレオポルト・モーツアルトの同僚【この場合M.ハイドン】であったならば、想像するのは難しかったであろう。ミヒヤエル・ハイドンはザルツブルクや宮廷でも働いた。レオポルト・モーツアルトが確かに尊敬していた巨匠ヨーゼフ・ハイドンの作品に対するラープのアプローチは、まったく想像もできないものであったであろう。これは“子供のシンフォニー”がヨーゼフとミヒヤエル・ハイドンの両者に帰属するということが再び妥当性を失ったことを意味する」^{注25}。

犬輔：またすっきりしなくなってきた…

教授：大崎滋生（1948-）は逆にこう述べている。「ト長調7楽章カッサツィオ」の作曲者はLMであって、それはミヒヤエル・ハイドンの“ハ長調3楽章おもちゃシンフォニー”的編曲を中心に取り込んだものである、ということになる。このような慣習はどこにでも存在するのであり、ザルツブルクでのこの2人の同僚関係からいえば、その行為自体が双方の了解のもとに成立していた可能性さえ指摘できるかもしれない。“おもちゃシンフォニー”をめぐる物語は、それが想定される演奏機会、子供たちを喜ばせるための大人们の真剣な努力、ともに演奏に加わって歓喜する子供たち、といったものをイメージしてみると、編曲拡大稿カッサツィオの第3楽章トリオ部分に、この種の器楽曲には似つかわしくない単純な齊唱が加わっているのは、楽器の数以上にたくさんの子供たちを演奏に参加させるための工夫ではないか。通例以上の特別な機会を華やかに飾るために、ホルンの目と耳に対する色彩的効果も加えて、大がかりな音楽としたのではないか」^{注26}。

犬輔：ぼくはこちらの説明に軍配を挙げます。

鳥代：でも“おもちゃのシンフォニー”的原作者は本当にミヒヤエル・ハイドンなのでしょうか。4人の中では最初に位置するのかも知れませんが、原作者であることが証明されたわけではありません。

教授：そうだ。ふたたびローベルト・ミュンスターの言葉に耳を傾けてみよう。「作曲者は4人のいずれでもなく、彼らはすでに存在していた“ベルヒテスガーデン音楽”ないし“シンフォニア”を探り入れて、それを自分の創作のなかで何らかの手を加えて利用したのではないか」。そして「原曲の由来は推測の域を出ない。ベルヒテスガーデン自体において名の知られていない音楽家、たとえば同地の侯爵司教聖堂に勤める者によって書かれたかもしれない」という仮説を披瀝し「とくに可能性のあるのはアントン・イエッットとフランツ・クサヴァー・フェムバッヒャーである」^{注27}と述べている。そのように考える人は他にもいるようで、原作者候補がいくつか挙がっている。ベルヒテスガーデンの

宫廷音楽家で作曲家のフェムバッヒャーFembacher一族（マティアス Mathias (1673–1748)、フランツ・マティアス Franz Mathias (1709–73)、ヨハン・バプテスト・パウル Johann Baptist Paul (1756–1809)）のうちの一人といふもの^{注28}、3つの子供のシンフォニーが使われている音楽喜劇『子供と音楽』を作曲したパウル・ヴラニツキーPaul Wranitzky (1756–1808) ではないか^{注29}、そしてレオポルト・モーツアルトの弟子でベルヒテスガーデンの楽器を使った音楽が残されているヨハネ・ネポムク・フランツ・ゼラーフ・ラインレヒターJohann Nepomuk Franz Seraph Rainprechter (1752–1812)^{注30}などだ。

鳥代：わたしが調べたところ M.ハイドンにベルヒテスガーデン楽器を使った曲はもとより、“滑稽”あるいは“遊び”を感じさせる曲がないので^{注31}、率先して“子供のシンフォニー”を創作するような作曲家ではなかったと思われます。もっと言えば、頼まれてもそのような内容の曲を編曲することすらありえない作曲家だったのではないか。

犬輔：原曲に既にベルヒテスガーデン楽器が使われていたけど、演奏に際して M.ハイドンがオーケストレーションだけを担当したことなら可能性はあるかも知れないね。“2つのヴァイオリン”ではなく、“ヴァイオリンとヴィオラ”が使われているのはアリア「いとしい人よ、もし私の苦しみのすべてを」K.deest と同様で^{注32}、ザルツブルクにおけるオーケストレーションの一時期における要求なのかも知れないですから。

教授：M.ハイドンのレパートリーについてはザルツブルクで演奏された舞曲を研究したときの議論も参考になる^{注33}。① ザルツブルク市民のための舞踏会はコントルダンスを主としていたが、モーツアルトにはその数が少なく L.モーツアルトと M.ハイドンは作曲していない。すなわち別の無名の作曲家がいたか、多くの場合はフランス或いはイギリスの出版物が使われたものと思われる。② ミッテンドルファーは「舞曲伴奏のためにもっともしばしば使われた楽器は 2 つのヴァイオリンとバスであった。時には Basso の表記がバス・ヴァイオリン (Violone) を意味していた。管楽器は多くの場合頻繁に組み合わせを変化させ舞曲の伴奏を拡大した。特別な効果を出すために通常の楽器に加え更に多くの楽器、例えばポストホルンあるいは“ベルヒトルスガーデン”楽器が使われた」と述べていた。③ コントルダンス K.269b は「フランス或いはイギリスのコントルダンス集の出版物から抜粋したものをおもにザルツブルクの無名の作曲家がオーケストレーションして大コントルダンスとしたものであろうと考えられ、帰郷したモーツアルト父子は M.ハイドンからクラヴィーアに編曲された大コントルダンスをもらい受けた。それがケルニーン伯爵の手に渡り、モーツアルト作とされてしまった」と我々は結論付けた。

鳥代：つまり教授は「M.ハイドンには創作しなかったジャンルにも編曲した曲の例があった」とおっしゃりたいわけですね。そのジャンルに“ベルヒテスガーデン”楽器を使う余地があったという話ができます。

犬輔：M.ハイドンにポストホルンを使ったシンフォニーがあることは申し添えておきます^{注34}。

4. モーツアルトは《おもちゃのシンフォニー》をどう捉えていたか

犬輔：モーツアルトがベルヒテスガーデンの楽器を使ったシンフォニーを聴きたいと思っていたことは、1770.10.6 付けのボローニヤから — ザルツブルクで音楽会があったとの留守宅からの報告に対する返信として — 姉ナンネル宛てに次のように書いていることから伺えます。「早くペルテルツカンマーのシンフォニーを聴いて、それに合わせて小トランペットか小笛を吹いてみたい」。ザルツブルクの音楽会でベルヒテスガーデンの楽器を使ったシンフォニーが演奏されたとの報告があったものと思われます。

鳥代：レオポルトの妻宛て返信には「コンサートは 3 回もあったのかね? — それに乾杯しようではないか! — ところでお前たちのどちらも私たちを招待しなかったね? — 私たちはすぐに行って、とんぼ返りしていただろうに」とあって僻(ひが)んでいます。演奏されたのがレオポルト自身のカッサティオだったからかも知れませんね。

犬輔：モーツアルトが伝ハイドンの“子供のシンフォニー”を聴いたかどうかについては、『ヴィーンの作家と芸術家の辞典』の 1793 版に次のように書かれています^{注35}。

ヨーゼフ・ハイデン。[...]

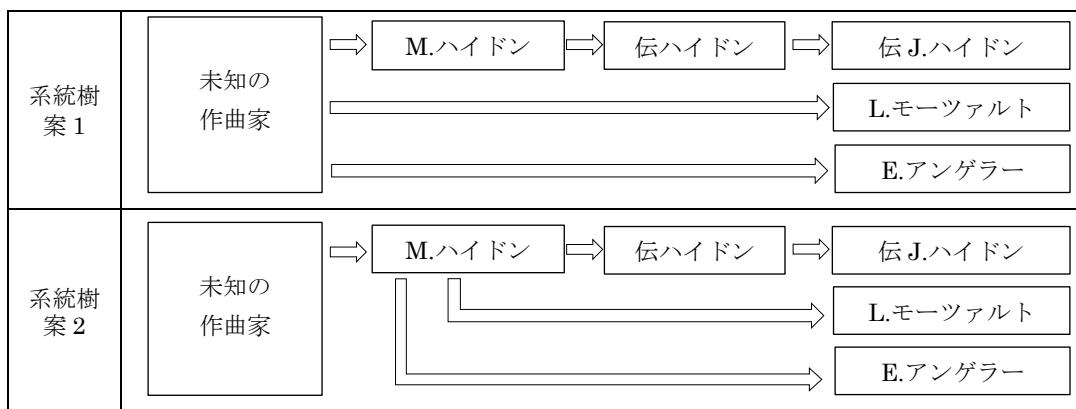
ハイデンはかつて、地元のウルズラ修道女たちの娛樂のために、考えられるあらゆるベルヒテスガーデンの楽器を使ったシンフォニーを作曲しました。その後、生前のヴォルフガング・モーツアルトは彼らの演奏を聴き、かつて遊び半分で似たような曲を書いた若い音楽家にこう言いました。「ここは、あなたの作品と今回の作品を比較し、最も取るに足らない茶番劇であつても先生を無視することはできないということを学ぶ機会です」。ここで思い出すべきは、かつてギャリックが、ある俳優が彼の前で酔っぱらいの役を練習していたとき、彼にこう言ったことです。「まだ左足が酔いきれてないね」。実際、達人になりたいなら、芸術の実践においてあらゆる細部に注意を払う必要があります。

鳥代：モーツアルトが伝ハイドンの“子供のシンフォニー”を聴いたということも然ることながら、そんなコメントを出したとは俄かには信じがたいことです。

教授：ディヴィッド・ブラックはこう述べている³⁶。前者に対して「モーツアルトがヴィーン滞在中に“子供のシンフォニー”を聴いたり、“子供のシンフォニー”にアクセスしたりしたことは考えられないことではない。このシンフォニーは1791.4.13にヴィーデン劇場の楽長ヨーゼフ・ズーヒエの慈善コンサートで演奏され、ポスターではヨーゼフ・ハイドンの作とされている。当時、モーツアルトはおそらく《魔笛》の作曲に携わっていたと考えられ、ズーヒエもおそらく新しいオペラの準備に関わっていたことを考えると、この劇場を訪ることは不可能ではない。写譜師で音楽ディーラーのヨハン・トレーカは、1792にこのシンフォニーをヨーゼフ・ハイドンの作品として宣伝し、トレーカの1799のカタログには作者不明で掲載された」。しかし続けてブラックは後者に対してこう述べている。「モーツアルトが“子供のシンフォニー”的ことを知っていた可能性はあるが、彼がこのようにコメントしたという考えは疑わしいと思われる。モーツアルトがハイドンの帰属を何の疑問もなく受け入れたと想像することは困難であり、モーツアルトの知人の“若い音楽家”の中で、現時点で同様の作品を書いた人は誰もいないことが知られている〔仮にラインレヒターだとしてもモーツアルトより年長である〕。この逸話はむしろ、歴史上のモーツアルトが、作家の信念の代弁者として機能する“モーツアルト”と区別されるようになった非常に初期の例だ。このプロセスは、フリードリヒ・ロホリッツの悪名高い“本物の”逸話で頂点に達した」。

5.まとめ

犬輔：“子供のシンフォニー”的作曲家系統樹をまとめておきましょう。



教授：両案ともM.ハイドン版が“子供のシンフォニー”的現時点で辿ることのできる最初のものだということを示している。そして案1はL.モーツアルト版とE.アンゲラー版は“子供のシンフォニー”とは全く系統が別だということを示しているね。曲のタイトルは確かに異なっていた。案2は“子供のシンフォニー”的音楽のすべてがM.ハイドン版を基にしているということを示している。

鳥代：案1は未知の作曲家の曲が大いに注目されていてこそ3人の作曲家がそれぞれの版を作曲したと考えられますから、そのような有名だった曲が現在何も残っていないというのは正直合点がいきません。

犬輔：ぼくも案2の方が納得いきます。L.モーツアルトはM.ハイドンの曲をリストしながら、全く異なる機会音楽としてカッサティオを構成していると思われますから。一方E.アンゲラーについては案2でなければいけない必然性は主張できませんが、案1が否定されるなら案2でしょう。

教授：質問答になってきた。議論はここまでにしておこう。

鳥代：“子供のシンフォニー”的演奏例を挙げておきます。

版	演奏例	備考
M.ハイドン版	該当なし	
伝J.ハイドン版	Zubin Mehta in October 2015, Mumbai, India	ほとんどすべてのCDは表題にかかわらずこの版で演奏
L.モーツアルト版	Neville Marriner, Academy of St. Martin in the Fields Orchestra	7楽章で演奏。R.グッドマン／ハノーヴァー・バンドも。
	Amsterdam Baroque Orchestra / Ton Koopman	5楽章で演奏。トリオにボイ・ソプラノのソロ
E.アンゲラー版	Ensemble "Sperger plus" am 8. Juni 2019 1. Toronto Chamber Orchestra / Kevin Mallon 2. Toronto Chamber Orchestra / Kevin Mallon 3. Toronto Chamber Orchestra / Kevin Mallon	L.モーツアルト版とE.アンゲラー版をミックスした演奏

教授：18世紀後半は“子供向け音楽”というジャンルに目を向けた最初の時代であった。啓蒙主義の教育学的推進力がおそらく役割を果たしているのであろう。“子供のシンフォニー”をその代表例として捉えることができる。モーツアルトもヴィーンで『子供のための歌集』のために3曲のリート「春への憧れ」K.596、「春の初めに」K.597、「子供の遊び」K.598を作曲している^{注37}。

- 注 1 : Herrmann-Schneider, Hildegard (1997). Edmund Angerer / Berchtoldsgaden Musick / "Kindersinfonie" / Erstdruck / Partitur Stimmen / herausgegeben von / Hildegard Herrmann-Schneider / Notensatz: Michael Schweißgut, Innsbruck / 1997 Institut für Tiroler Musikforschung, Innsbruck [∞](#)
- 注 2 : 前掲 Herrmann-Schneider (1997)
- 注 3 : 大崎滋生 (2006). 『レオポルト・モーツアルトをめぐる 2つの偽作問題と“音楽学” – “おもちゃ交響曲”と“ランバッハ交響曲”』(『桐朋学園大学研究紀要』32、p.1-16 (2006) [∞](#))
- 注 4 : 前掲大崎 (2006)
- 注 5 : Schmid, Ernst Fritz (1951). Leopold Mozart und die Kindersinfonie (Mozart-Jahrbuch, 1951, p.69-86)
- 注 6 : 前掲 Schmid (1951)
- 注 7 : Haydn Kinder-Symphonie, Leipzig: Breitkopf & Härtel, n.d. Plate Part.B. 282. [∞](#)
- 注 8 : 前掲 Schmid (1951)
- 注 9 : Münster, Robert (1969): "Wer ist der Komponist der Kindersinfonie?" (Acta Mozartiana, 1969 Nov., p.76-82)
- 注 10 : 野口秀夫 (2008). 「競売に出されたモーツアルトの手紙」神戸モーツアルト研究会 第204回例会 [∞](#)
- 注 11 : Eisen, Cliff (1988). The symphonies of Leopold Mozart and their relationship to the early symphonies of Wolfgang Amadeus Mozart: a bibliographical and stylistic study (Diss. 1986), Ann Arbor/ Mich. 1988. (前掲 Herrmann-Schneider (1997) から再引用)
- 注 12 : Schmid, Ernst Fritz (1952). Nochmals zur "Kindersinfonie" (Mozart-Jahrbuch, 1952, p.117-118)
- 注 13 : 前掲 Herrmann-Schneider (1997)
- 注 14 : Wikipedia : エトムント・アングラー [∞](#)
- 注 15 : 日本コロムビア株式会社 ダイヤモンド1000シリーズ MS-1119-N (1971) [∞](#)
- 注 16 : 近藤健児 (2022). 「ハイドン、高い人気、多い偽作」、『クラシック偽作・疑作大全』近藤健児、久保健 青弓社, 2022】所収 [∞](#)
- 注 17 : 野口秀夫 (2012). 『チロルで発見されたモーツアルトの知られざるクラヴィーア小品』神戸モーツアルト研究会 第224回例会 [∞](#)
- 注 18 : Herrmann-Schneider, Hildegard (1996). Edmund Angerer OSB (1740-1794) aus Stift Fiecht / Tirol - der Komponist der Kindersinfonie?, in: Mozart-Jahrbuch 1996, S. 23-38
- 注 19 : 前掲 Herrmann-Schneider (1997)
- 注 20 : 前掲 Herrmann-Schneider (1997)
- 注 21 : 前掲 Herrmann-Schneider (1997)
- 注 22 : Gerlach, Sonja (1991). Textkritische Untersuchung zur Autorschaft der "Kindersinfonie" Hoboken II: 47* (Hanspeter Bennwitz 他編 Operaincerta. Echtheitsfragen als Problem musikwissenschaftlicher Gesamtausgabe. Kolloquium Mainz 1988 [Stuttgart, 1991], p.153-192). (前掲大崎 (2006) から再引用)
- 注 23 : 前掲 Gerlach (1991) (国立音楽大学附属図書館広報委員会「偽作? 疑作?」(2009) [∞](#)から再引用)
- 注 24 : 前掲 Herrmann-Schneider (1996)
- 注 25 : 前掲 Herrmann-Schneider (1997)
- 注 26 : 前掲大崎 (2006)
- 注 27 : Münster (1969). (前掲大崎 (2006) から再引用)
- 注 28 : Wikipedia : Kindersinfonie (ドイツ語) [∞](#)
- 注 29 : 中野博詞『ハイドン復活』春秋社 (1998) (JY 氏の「こだわり音楽館：おもちゃの交響曲」から再引用 [∞](#))。パウル・ヴラニツキーに3つの子供のシンフォニーがあるらしいのは Camillo Schoenbaum: Die Böhmisches Musiker in der Musikgeschichte Wiens vom Barock zur Romantik, in: Studien zur Musikwissenschaft, 25. Bd., Festschrift für ERICH SCHENK (1962), pp. 475-495 による。 [∞](#)
- 注 30 : 前掲 Wikipedia : Kindersinfonie (ドイツ語)
- 注 31 : Charles H.S herman and T. Donley Thomas: Johann Michael Haydn (1737-1806): a chronological thematic catalogue of his works, Pendragon, 1993. 真作とされているカノン「くそったれ、哀れな罪人よ」ハ短調 MH700 を滑稽や遊びのカテゴリーに入れないとカウントしている。
- 注 32 : 野口秀夫 (2022). 『アリア「いとしい人よ、もし私の苦しみのすべてを』ハ長調 K.deest の詩テキストと音楽テキストの関係』神戸モーツアルト研究会 第293回例会 [∞](#)
- 注 33 : 野口秀夫 (2010). 『モーツアルト時代におけるザルツブルク市民の舞踏行事』神戸モーツアルト研究会 第216回例会 [∞](#)
- 注 34 : M.ハイドンのシンフォニア イ長調 MH302 (1781) のメヌエット楽章のトリオには cor di post が、6つのメヌエット MH414 (1786) には cor. Post が使われている。
- 注 35 : Wiener Schriftsteller und Künstler Lexikon oder alphabetisches Verzeichniß aller gegenwärtig in Wien lebenden Schriftsteller, Künstler und Künstlerinnen ... Wien: Im F. J. J. von Reillyschen Verlage. 1793
- 注 36 : Black, David (2015). "Mozart comments on 'Haydn's' Toy Symphony (1793)." In: Mozart: New Documents, edited by Dexter Edge and David Black. First published 21 July 2015. [∞](#)
- 注 37 : Michael Haydn "Kindersinfonie", in Villa Musica rheinland-pfalz [∞](#)

追記

教授：JY 氏の「こだわり音楽館：おもちゃの交響曲」サイト^{注38}には「従来版として多く使われてきたプライトコプフ版のスコア、アングラー版、L. Mozart のカッサシオンの主な違いについてまとめました」とあり、充実した研究成果が示されている。しかし、「ミヒヤエル・ハイドン版の資料については参照できなかったが、機会があれば検証したい」とされている。諸君たちで閲覧可能な M. ハイドン版を探してみてはどうか。

犬輔：RISMでM. ハイドンを検索して、Kindersinfonieで絞り込んでも何もヒットしません。

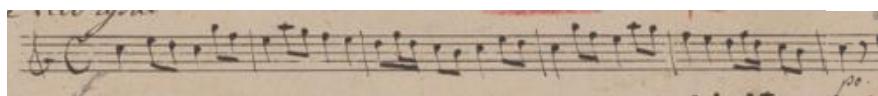
鳥代：そこで Kindersinfonie で検索して、その中から閲覧可能なものを開いてみました。

犬輔：M. ハイドン版はあったのですか。

鳥代：なかったけれど、アイヒュステット・インゴルシュタット大学図書館に Esl VIII 7 の番号で所蔵されているヨーゼフ・ハイドン名のパート譜が、ヴァイオリンとヴィオラの編成なので^{注39}、M. ハイドン版に近いパート譜かも知れないという期待を抱かせます。



譜例1 Breitkopf & Härtel, n.d. Plate Part.B. 282 第1楽章冒頭 ヴァイオリン・パート



譜例2 D-Eu: Esl VIII 7 第1楽章冒頭 ヴァイオリン・パート

犬輔：でも、その譜面（譜例2）にはスラーやスタッカートが全く書かれていないので、品質は良くないと言わざるを得ません。とは言え、2小節目の3、4拍、5小節目の1、2拍が四分音符2つで書かれているのは興味深いですね。それぞれの最初の四分音符に前打音を付ければ（演奏例）伝ハイドン版（譜例1）に近づきますから、M.ハイドン版が表記の変化を経ながら伝ヨーゼフ・ハイドン版になっていく途中過程を示しているのかもしれない。

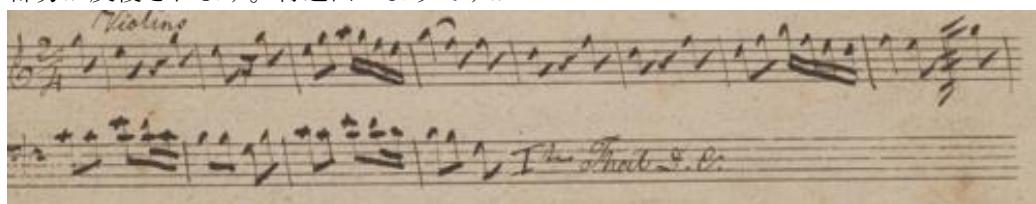
鳥代：とりあえずJY氏がチェックしている箇所の異同を見ておきましょう。

アイヒュッテット・インゴルシュタット稿の異同

楽章	小節	異同	同じ内容の版
第一樂章	20小節3拍目	Vn: e ² c ² d ² Va: c ¹ e ¹ d ¹	アンゲラー版
	31小節1拍目	8分音符と16分音符2つ	アンゲラー版
	41小節1、2拍目	Va: b音	アンゲラー版
	44小節1拍目	前打音なし	アンゲラー版
	44小節3拍目	Vn: 6度跳躍	アンゲラー版
	48小節1拍目	前打音なし	アンゲラー版
	60小節	pのまま	アンゲラー版
第二樂章	3-6小節	Vnがカッコウのリズムのpizz. その後Vaがメロディ	アンゲラー版
	3小節	pなし	アンゲラー版
	第13(29)小節1拍目	3連符	従来版（ライトコープ版）
	第13(29)小節3拍目	Vn: トристルなし	アンゲラー版
	第14(30)小節	倚音なし	アンゲラー版
	第15小節3拍目-第16小節1拍目	Vn: f ² d ² e ²	アンゲラー版
	第38(50)小節	上からの前打音付き二分音符と四分音符	ユニーク
	第40小節	Vn: C ² 2拍分	ユニーク
	第56小節	Vn: f1 2拍分	アンゲラー版
第三樂章	テンポ指示	Prestoで反復指示はない	ユニーク
	第7小節	VaはVnのオクターブ下	アンゲラー版
	第8-10小節	Va: 16分音符の刻みc ¹	アンゲラー版
	第14小節	最後の8分音符に♯なし	アンゲラー版
	第27-29小節	c ¹ -e ² -c ³	アンゲラー版

犬輔：アンゲラー版に近いのは意外でした。アンゲラー版が早くに分岐したという意味はこのことだったんですね。従来版と同じところや、他の版には見られないユニークなところがあるのは版の変遷の過程を示していることの表れでしょう。

鳥代：あらっ、第3楽章の後ろに2/4拍子の楽章がありますよ（譜例3）。（8+4）小節で8小節部分が反復されます。行進曲のようですが…



譜例3 D-Eu: Esl VIII 7 第3楽章のあと ヴァイオリン・パート

教授：確実な楽譜研究のためにはメルク修道院の筆写譜の閲覧が必須だね。後日を期待しよう。

注38：前掲JY氏のこだわり音楽館：おもちゃの交響曲。同サイトにはE.アンゲラー版の第3楽章MIDI演奏もある。

注39：Eichstätt, (D-Eu): Esl VIII 7. カバータイトルは“Kinder Symphonie | für | 1 Violin, Viola, Bassoon | und | 8 Kinderinstrumente | nämlich | Trompete, Trommel, Pfeifchen, Cymbelstern, | Nachteule, Schnarre, Guckguck, Wachtel | componirt | von | Joseph Haydn [!] | in | Berchtesgaden. | Preis 12gr. | Leipzig bei Fried. Hofmeister.” ∞ RISM ID no.: 450200554 ∞